

平成 27 年度スーパーバイザー事業報告書

研究テーマ

「なかまとかかわりながら、よりよく生きようとする東っ子の育成」

～伝え合い 人間関係を深め 自分たちでつくる生活を目指して～

八頭町立郡家東小学校

スーパーバイザー：國學院大學 人間開発部 杉田 洋 教授

1 はじめに

本校は、全校児童 220 名、私都谷の入り口に位置し、緑豊かな自然に囲まれた学校である。児童は素直で指示されたことを正確にやり遂げる真面目さを持っているが、活動への意欲や喜び、もっと良くしようという創意工夫の経験が少なく、自己有用感が低いことが課題としてあげられる。そこで、自分の考えや思いを伝え合い人間関係を築くことを大事にしながら、自発的、自治的な活動をつくり、よりよく生きようとする東っ子の育成を目指して、研究テーマを設定した。そして、本年度は、國學院大學人間開発部の杉田洋教授にスーパーバイザーとしてご指導いただき、研究を深めることができた。

2 研究のねらい

(1) これまでの研究の流れについて

平成 25 年度から「伝え合う」ことを重点とし、国語科を軸として伝え合うことができる児童の育成に取り組んできた。教科の内容理解は当然であるが、授業で温かな人間関係を築くことにも力を置き、自分と違う考えを認め合ったり、友だちの頑張りに気づいたりしながら、取り組みを継続しているところである。

(2) 国語科と特別活動とのかかわりについて

これからの社会を生き抜いていく児童にとって、人とよりよくかかわる力は、「生きていく力」そのものだといえる。「授業で豊かな人間関係を築き深める」という観点からも、国語科を軸とした授業改善で伝え合うための言葉や表現、コミュニケーション力をつけ、授業で培った力と特別活動で培う力を、互に行き来させ、「よりよい人間関係を築く態度や社会参画の態度を育てる」ことを大事にする研究を進めていく。

(3) 特別活動への取組に向けて

授業づくりで、学力の向上と温かな集団づくりを図ってきたこれまでの取組を踏まえ、今年度は、生活づくり(社会参画の態度)へと研究を進めていく。

昨年度、代表委員会と各委員会、各学級の運営を見直し、異年齢集団による交流の充実を図り、学校行事への協力を意識した活動を取り入れてきた。「自分たちで学校をよくするために」という視点が見え始め、児童会としての機能が少しずつ働き出したところである。

学級の話合い活動においても、計画委員会を機能させ、折り合いをつけることの大切さに気づかせながら、児童が自分たちの学級や学校の生活をよりよくするための話合いに向かいはじめた。児童が必然性を持ち、自分やみんなのことを考え、協働して活動を工夫することを通して、熱い思いを持って活動していけることを願っている。したがって本年度は、「かかわり合うことの心地よさを感じ自信あふれる子ども」を育てていきたいと考えている。

(4) 研究構想

学校教育目標

豊かな心と学びを身につけ、夢や希望をもって自立して生きる児童の育成

<めざす子ども像>

- ～郷土を愛し、自ら学ぶ徳知体のバランスがとれた子ども～
- 自他を大切にする子ども（豊かな人間性の育成）
- 進んで学ぶ子ども（学力向上）
- 健康や体づくりに取り組む子ども（たくましい心と体の育成）
- ふるさとおもいう子ども（郷土を基盤にした志の育成）

自己有用感の低さ

- ・活動をより良くするための発想や創造力が弱い。
- ・周囲に流され易く、自分で判断して行動することが苦手。
- ・自分の考えをはっきりとした声で話したり、友達の考えをしっかりと聞いたりすることが苦手。

【子どもの実態↓これから改善したいところ】

身につけさせたい力→人間関係力

伝え合う力

- ・思考を深める聞き方、話し方
- ・言葉の力、言語活動の充実

<思考、受容>

ルールを守る力

- ・学習のルール
- ・学校生活のルール

<規律遵守>

チームで働く(社会参画)力

- ・企画、実行、ふり返り
- ・合意形成

<協働>

目標に向かって進む力

- ・自己理解と目標設定
- ・実現する意志
- ・主体性

<自己実現>

素直でまじめ

- ・指示されたことに一生懸命に向かい、最後までやり遂げる「ことができる」。
- ・素直で、よりよい自分になりたいという思いを持っている。

【子どもの実態↓すばらしいところ】

研究主題

「なかまとかかわりながら、よりよく生きようとする東っ子の育成」
～伝え合い 人間関係を深め 自分たちでつくる生活を目指して～

自分たちでつくる学級・学校の生活

生活づくり(社会参画) 特別活動

自発的、自治的な望ましい集団活動

かかわり合うことの心地よさを感じ

自信あふれる子ども

主体的に見通し持ち、確かな力がつく学び

授業づくり(国語科を中心)

全員が参加し、思考を深める授業

3 年間の活動の概要

月	日 (曜日)	研修の内容
4	17 (金)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全学級学習公開 ・ 5年2組 学級活動(1) 学習公開 ・ 講義「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動」 協議、質疑 指導助言 國學院大學 杉田 洋 教授
5	20 (水)	校内授業研究会1「国語」 本校 授業の基本について 3年2組
	27 (水)	校内授業研究会2「特別活動」 4年2組
6	3日 (水)	校内授業研究会3「特別活動」 6年2組 3年1組
7	24 (水)	校内授業研究会4「特別活動」 2年2組 4年1組 指導助言 東部教育局 長見圭祐 指導主事
10	5日 (月)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究の経過説明 ・ 全学級授業参観 ・ 研究についての協議 ・ 指導計画に対する指導助言 校内授業研究会5「特別活動」 6年1組 2年1組 指導助言 國學院大學 杉田 洋 教授
11	25 (水)	校内授業研究会6「特別活動」 5年1組 指導助言 東部教育局 長見圭祐 指導主事
1	20 (水)	校内授業研究会7「特別活動」 1年 指導助言 東部教育局 長見圭祐 指導主事

4 杉田先生に指導助言をいただいた事項

【4月】

学校・学級生活全般を見直す必要がある

〈本校の児童の印象〉

- ・エンジンが弱い
- ・ハンドルを教師が握っている
- ・ブレーキがききすぎている
- ・抑制的な行動が多い

教師集団に意識改革を

- ・信頼性と同僚性
- ・活力ある風土と空気
- ・教師力(活力、ハート、センス)
- ・パイオニア的風土で
- ・子ども達の笑顔を喜べるのか。
- ・学校生活を楽しむ子どもたちを本当に育てたいのか

時間の保障

- ・自主的に活動する場を保障する
- ・自治的な活動の時間をつくる
(時間をかけて育てる)
- ・朝の会、帰りの会を学校でそろえることも
(この時間は子ども中心の時間)

教科指導もアクティブラーニングに
特別活動と同じようにステップ性を考える

教科で身につけた力⇔特別活動で生かし使える力

- ・汎用的能力となること ・先読みができる学び
- ・要約能力を付けることを強調
(〇〇字以内でまとめるなどの取り組みも必要)
(メモを取りながら聞く力を特別活動の中で活かす等)
- ・チームで取り組む
(グループ活動も計画委員会もチーム)

研究について

どんな学校にしたいのか
どんな子どもを育てたいのか
どんな成果を求めているのか

ゴールを見せなければだめ！

どんな子どもを育てたいのか！みんなで話合いました。

〈課題〉

自己有用感が低い **自信がない**
経験が少ない 主体性がない受け身
リーダーいない 創意工夫の経験がない

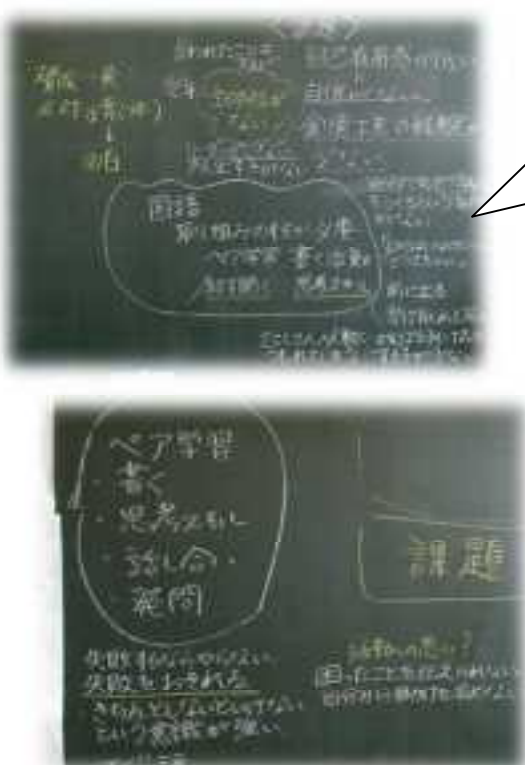
目指す姿は…

「かかわりあうことの心地よさを感じ

自信にあふれる子ども」

～集団活動を通して～

- ・経験をさせる
- ・リーダーの育成
- ・創意工夫の経験
- ・認める場
- ・主体性を発揮させる場
- ・自分が好き なかまが好き



【10月】

特別活動は、日常の指導 と 授業 の力を 出すところ

学級活動をはじめ、委員会や学校行事がうまくいくのは、それだけやってもいけない。日常の中でどんな取り組みをし、授業をどう改善しているのかが問われている。

- 普段の授業での授業力が、学級活動につながる。
- 発言をつなぐためのルール
- 学習環境、言語力はどうなっているか。
- 言語活動が必要。それを支える学級づくり

- 郡家東小学校「考えるアイテム」
- 郡家東小学校「話すこと・聞くこと」
- 郡家東小学校の当たり前
- 言葉の力アップ大作戦
- 学級力アンケート

- 21世紀型能力
- アクティブラーニング
子ども達を能動的にしたい。→教師が先頭に立ってやってしまうと子どもは育たない。
- 汎用的能力 → 汎用的な能力をつけるには日常の指導をどうするかを考える。

- だれが見ても分かるようにする。
可視化とステップ → 道具を使ったり身体を使ったりした発言も。板書の工夫。
- 思考の時に条件を与える。
(思考ツール) → 総合的な学習の時間で、思考ツールを使えるようにしておく。
- 合意形成には、「比べる力」「まとめる力」が大切

- 1つを選ぶとき、他を批判して落とすのではなくて、「出し合う」→「わかりあう」→「解決する(生かし合う)」という流れを模索してほしい。

くらべ合う → わかり合う
まとめる・決める → 生かし合う

郡家東小学校 「考えるアイテム」(例)

<話出しの言葉>

「つまり」
「だから」
まとめ

「でも」「だけど」
「～に反対なんだけれど」
ほんたい

「もし」「だったら」
「たぶん」
すいてい

「その他に」
「付け加えると」
つけくわえ

「だって」「だから」
理由

「たとえば」
れい
く体てきに

5 研究内容

(1) 授業作り

杉田先生に指導を受けたことを学級活動(1)の授業作りに生かすように努めた。それぞれ本校の課題を解決するためよりよい授業となるよう工夫した。

実践 I 学校生活の充実と向上を目指した授業(体験活動との関連)

6年生児童は、最高学年として、自分の役割に真面目に取り組んでいこうとする意欲があり、決められた役割や活動では力を発揮できるものの、自分たちで考え、学級をよりよいものにしていこうという意識は低かった。そのため、「みんなで取り組む」「みんなの思いを生かす」を、学級会での合言葉として、自分たちの力で学級を創っていこうとする集団を目指し、活動を展開した。

①事前の活動(議題選定、計画委員会)

2学期の学級会1回目「6の1思い出プロジェクトについて考えよう」

学級みんなで一生の思い出に残る活動に団結して取り組み、卒業までの残りの日々を充実させようと話し合った結果、長縄跳びの鳥取県ランキングに参加しようということに決まった。その後の練習の中で、児童は様々な課題に直面し、計画委員会の話合いのもと、「6の1思い出プロジェクトを成功させよう」が選定された。

2学期の学級会2回目「6の1思い出プロジェクトを成功させよう」

○アンケートの実施

長縄跳び練習後には、毎回短時間のミーティングを行い、問題点を明確にしたり、活動の軌道修正をしたりする力を身に付けることが出来るようにした。さらに、言葉には出せない児童個々の思いを捉えるため、学級会前にアンケートを実施した。このことにより、学級の中で、どのような思いを持つ児童がいるのかが明確になった。

○板書の整理

意見の分類・整理ができるように、短冊に意見を書き、それを貼る位置や動かし方を工夫することで、話合いの流れが分かりやすくなるようにした。また、予想される意見を計画委員会と話し合い、柱2については、3つの観点に分けた思考ツールYチャートを使っ



ての板書の整理を行った。観点を分けて考えたことにより、児童は、友達の考えをよく聞き、その意見を尊重しながら自分の考えを述べるなど、共通のイメージを持って話し合う姿が見られた。また、関連する意見はチョークで囲んだり、出てきた意見を書き加えたりするなど、板書の構造化も図った。思考ツールYチャートを使っ

②事後の活動

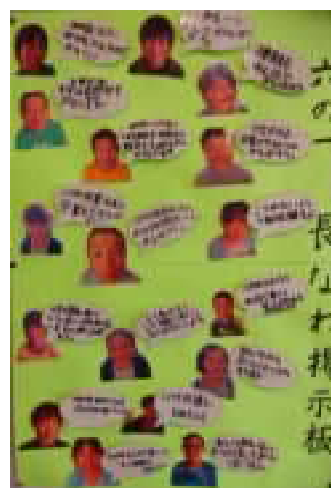
学級会後、練習日を決めて連続長縄跳びに挑戦した。練習を続けていく中で、技術的な面での課題やチームワークに関する課題に何度も直面した。その度に、ミーティングや帰りの会で、学級全員が納得できるように話し合い、軌道修正を行ってきた。新たに決まったことは付箋に書いて貼ったり、記録をグラフに表したものを教室に掲示したりしながら、学級全体が同じ目標に向かうこと

ができるようにした。この他にも、長縄跳び掲示板を作り、思いが共有できる場づくりに努めた。

事後の実践の中でも、課題を自分たちの問題として捉え、全員で話し合おうとする姿が多く見られるようになった。全員が協力して活動に取り組んだことで、自己存在感や自己有用感を高めることができ、よりよい人間関係を築くことができた。

普段の学習の中で身に付けた言語力や学級力が、学級活動へとつながっていく。今後、思考ツールや話型など、他教科の学習でも適時取り入れ児童の思考力や実践力を高めていきたい。

「生かし合う」段階でどのような話し合いができるのか、まだ模索中である。実践の中で探っていきたい。また、学級活動（2）との関連も合わせて図って行きたい。



実践Ⅱ 学級活動(2)と関連させた議題を選定した授業

5年生では、学級活動(2)「最高学年を目指して 5年生」という題材を通して、最高学年に向けてどのような力を身につけるべきなのか、6年生へのアンケートと自分たちの考えとを比べ、現状を見つめ直すことで、個々が努力すべきことを目標として設定して取り組んだ。そして、さらに学級としての力を高めていくために、協力して1つのプロジェクトに取り組んでいきたいという提案が児童から挙がり、計画委員会の話し合いのもと議題を選定された。

5年生が考える「最高学年に必要なこと」

- ① 仲間づくり 仲間との信頼関係 協力
- ② あいさつ お礼 返事
- ③ 人前で話す 自分の思いを伝える

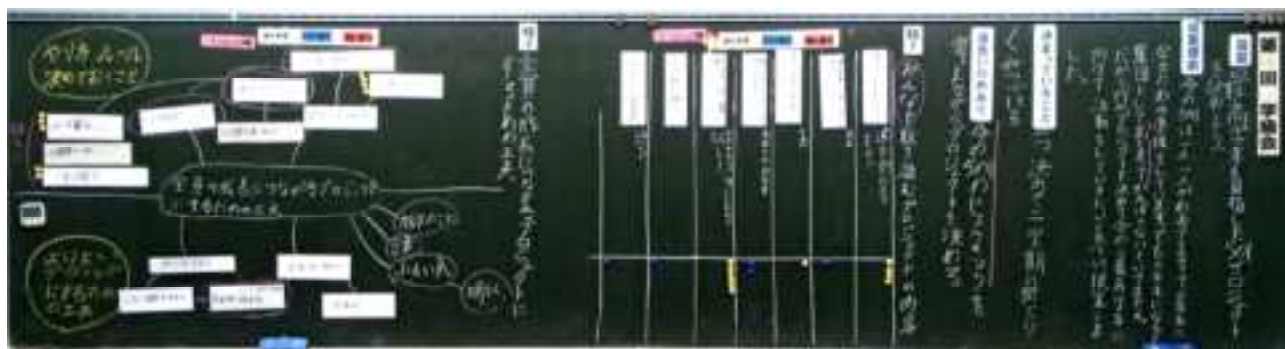
6年生が考える「最高学年に必要なこと」

- ① 仲間づくり 仲間との信頼関係 協力
- ② 当たり前ことは当たり前にする
- ③ ちょう戦し、最後まであきらめない
- ④ 相手の立場に立って物事を考える
- ⑤ 人前で話す 自分の思いを伝える
- ⑥ まちがっていることを注意する
- ⑦ あいさつ お礼 返事
- ⑧ 人の話を聞く。
- ⑨ 自分から進んで行動する
- ⑩ きまりを守る その場にあった行動をとる

①学級活動（1）

「最高学年を目指した5の1プロジェクトを決めよう」

柱1では「みんなで取り組むプロジェクトの内容」を、それぞれの意見のよさを確かめながら話し合った。柱2では、「全員の成長につながるプロジェクトにするための工夫」について、学級の実態に応じて何を重点的に取り組むのか、様々な意見を分類・整理しながら話し合った。「最高学年として必要な力」「今の自分たちの現状」「学級みんなが成長できる」を話し合いのキーワードに設定し、話し合いを進めていった。教室には、学級の実態がわかる表を掲示し、話し合いの際にいつでも振り返られるようにした。



「〇〇もよい意見だけど、今の私たちの状況を考えると…」 「〇〇に決まったら、6年生になったときに…」という意見が出され、今の実態やこれからつきたい力を踏まえた話し合いが行われた。

②5の1プロジェクトの取組の実際

低学年と休憩時間に遊ぶことが決まり、必要な役割を考え、一人一役受け持つようにした。日程調整をしたり、低学年に遊びの希望調査をしたり、低学年の立場に立ったルールを決めたりし、学級全員に「報告・連絡・相談」するようにした。そうすることで全員が同じイメージを共有し、活動をよりよくするためのアイデアを付け加えていくことができた。



児童は、名前を覚えて呼びかけたり優しく接したりするなど、相手を気遣いながら活動していた。その日の内に良かったところと改善点を話し合い、次への取り組みへのめあてにつなげていったので、回数を重ねるごとに、計3回のプロジェクトが充実したものとなっていった。

児童の振り返りより

- ・私は、ふだん1人でする役わりはしませんが、5-1プロジェクトは成長するためにきかしたので1人でやる役わりに思い切って立ちうほしました。また、はじめのあいさつにも立ちうほしました。これは、6年生になったらみんなの前に立って発表する機会が増えるのでやってみようと思って進んできたことができました。
- ・協力したり自分たちで動いたりする力が高まったと思います。言われなくても低学年を注意したり、協力して準備したりできていたのがよかったです。一人一人が意識して動くことで、よりいっそう楽しい会になることが分かりました。課題は、もり上げ方だと思います。低学年も初対面できんちょうしているから、わたしがハイタッチや声かけをすることできんちょうもほぐれてくると思いました。

学級活動(2)で決めた自己目標と今回のプロジェクトが共に一緒の方向性を目指していたので、児童は自分の、または学級集団としての目指す姿に向かって、みんなで成長していこうという意欲を抱きながら取り組むことができた。自分たちの今の実態に応じて決定したプロジェクトであったことと、毎回の振り返り活動をするることによって、自分たちの成長が実感できたようで大きな自信となった。

話し合うときや活動を計画するときに、児童が同じイメージを持って取り組むことに課題が見られる。話し合う段階から具体的な意見を出していくことが必要だと感じた。

実践Ⅲ 東雲学級が合同で学級会を行う授業

特別支援学級東雲1組(知的障がい)、2組(自閉症・情緒障がい)、3組(病弱・身体虚弱)で、3学級合同学級会を行った。3学級のつながりや仲間意識を高めること、交流学級より集団が小さいので自分の意見を発表しやすいことなどが、取り組みの理由である。児童の社会的自立に向けての一つの実践として取り組んだ。

- 7月「1学期がんばったねの会をしよう」
- 10月「しののめ学級の花だんに花をうえよう」
「しののめ学級のかんバッチを作ろう」
- 11月「みんなが楽しめる しののめなかよしオリンピックをしよう」
- 3月「6年生のそつぎょうをおいわいしよう」

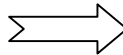


自分の考えを持ち、みんなのことも考え、根拠をはっきりさせながら伝え合う

○事前の体験や、教室掲示

自分の考えを持てるように、予め議題に沿った体験をさせたり、写真を掲示したりしておく。

○計画委員会で絞った意見カードの提示、活動のプログラムの提示

それぞれの意見が分かりやすいように、写真（絵）・文で提示する。  集会活動のイメージを持たせるために、当日のミニプログラムを提示する。

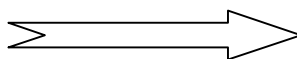


「折り合いをつけて」決める

○話し合いのルールカードの掲示

○ホワイトボードやシールの活用

ボードに書いて促す、よい発言のとき花丸を書いてほめる。



- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①自分もよくて、みんなもいい。 ②みんなが楽しい。 ③声をかけ合う。 ④相手にゆずる。 |
|--|

事前に議題に沿った体験をさせておくことで共通のイメージを持ち、話し合いを焦点化させることができた。意見を言う度にその児童の写真カードを貼ることで全員の意見を出すことが習慣化され、議題の内容が自分の問題となって一生懸命考えて言おうとしていた。交流学級での学級会でも自信を持って発言することができるようになった児童が増えてきた。また、全員が集まって活動することで仲間としてのつながりができ、互いに認め合って自尊感情を高めることができつつある。普段折り合いがつけにくい児童も周りの友達の意見に耳を傾けて決定することができた。

学級会ノートを活用し一人一人が理由を言いながら意見を出すことができるようになってきたが、友達同士の意見をつなげることはまだできていない。これから、教科の学習の中で、「話し合いのアイテム」を活用し少しずつ意見をつなげていきたい。

(2) 児童会活動の活性化

児童の主体的な活動の場として、委員会、集会等を活用し、創意工夫の経験をさせることで、自己有用感やリーダー性を育成したいと考えた。活動が活性化できるよう今までやってきたことももう一度振り返って見直す等、活動の意味を考えながら取り組むようにした。

①1学期「1年生をむかえようキャンペーン」

企画委員会で「みんなが仲良くできる学校」「いじめがなく安心して通える学校」にするためにどうしたらよいか話し合い、6月の生活目標を『全校のみんなの名前を覚えてたくさん話そう』と設定し、なかよしキャンペーンを実施することにした。代表委員会での提案により、広報委員会では校内放送による学年紹介、飼育委員会ではうさぎとのふれあいランドを行うなど各委員会で活動を工夫した。

②児童集会「かがやくひとみ集会」

企画委員会は全校が参加できる『かがやくひとみ集会』を企画運営した。5月の代表委員会では児童集会「かがやくひとみ集会」の活動を「1年生を迎える」と

いうキーワードで話し合った。はじめは、自分たちのしたいことで話し合いが進んでいたが、キーワードを意識する発言が続き、「名前あてゲーム」を決



定することができた。会の当日は、企画委員会の児童、なかよし班のリーダーを中心に進め、異学年での交流が深まっていった。

③児童集会「なわとび集会」

11月体育委員会企画の『なわとび集会』を行った。学級対抗で8の字跳びの回数を競う集会である。体育委員会の呼びかけに各学級とも休憩時間を使って練習に励んできた。学級会で話し合ったり、上学年が下学年にアドバイスをしたり自分たちで決めた目標に向かって切磋琢磨していった。集会当日は大きな声援に励まされ、記録更新を目指してひたすら跳び続けた。どの学級も目標へ向かっての団結力が深まった集会であった。



④缶バッジの作成

なかよしキャンペーン第2弾の取り組みとして代表委員会で話し合い、クラスごとにデザインを決めて作成することになった。昨年度に作成した経験を生かし、学級目標やみんなのことを考えた言葉やイラストが入るなど工夫を凝らした物になった。「学級をまとめるしるしとなるようなものを作りたい」という提案理由から話し合いを始めた学級があり、できあがったバッジをつけることで、学級の所属意識が高まっていった。



⑤学校行事への協力（作品展）

代表委員会において学校行事への「協力」というキーワードをもとに話し合った。児童からは、来場者にゆっくり見ていただきたいという気持ちから、案内パンフレットの作成、かざりつけ、そうじなどの意見が出され、決定された。来校者に心ゆくまで楽しんでほしい思いで話し合いが進んだ。



6 研究のまとめ

《成果》

- 指導の視点として、よく聞き、繋がりを持ちながら思考させていくことを重視していくために、「郡家東小学校考えるアイテム」などの作成をした。教科、領域で使っていくことを、共通理解して指導していく体制ができた。
- 計画委員会から学級会開催の流れが定着し、学級会を楽しみにする様子や決まったことはしっかりと守ろうとする雰囲気が出来上がってきた。
- 学級会で担任、児童ともに「キーワード」を共有して話し合うことで、提案理由に添った話し合いをすることができた。
- 学級会の板書に、思考ツールを取り入れた取組について研修できた。
- 学級会で少人数の考えを大切にしたり、折り合いをつけた児童や計画委員会のがんばりを認めたりすることを継続することで、友達を大切にする学級会、学級作りの基礎へとつながった。
- 集団決定や自己決定の場ができたことで、目標を持った生活を意識できた。目標に向かって協力する

ことの大切さにも気づき始めている。

- 係活動、委員会、縦割り活動、児童集会などで、事前の把握、企画、準備、運営、振り返りまでの経験をさせることができ、児童が主体的に活動する場を保障できた。教師の継続的な指導に支えられ、高学年の意識や実行力が高まった。児童も出来たことへの満足感を味わい、自信へと繋がってきている。
- 東雲1、2、3組合同の学級会が実現し、交流学級での学級会でも学んだことを発揮できた。
- 今まで、授業、活動、行事が点だったものが線となって繋がりは始めている。

《課題》

- 友達の考えを理解し、自分の考えに取り入れながら聞き、「郡家東小学校考えるアイテム」を使って、繋がりを持った話し合いができるようにすること。
- 各教科・領域での言語活動を充実させると共に、温かい授業作りをすること。
学習と生活それぞれで身に付けた力がどうかさか合っているかを探ること。
- 学級会の話合いの「くらべ合う」「生かし合う」「わかり合う」「まとめる」段階を整理したり工夫したりして、それぞれの議題にあった展開を考えていくこと。
- 学級会の話合いにおいて、共通のイメージを持てずぶれがうまれた。視覚的資料である具体物や動作を臨機応変に取り入れた説明も取り入れていくこと。
- 今年度の経験を踏まえ、自主的・自発的な活動ができるようにしていくこと。
- 学級活動(2)についての研修も深めていくこと。
- 発達段階による指導内容の系統性や年間計画への位置付けなどを整理していくこと。
- 指導案の形式の中に、本校らしさを入れていくこと。

7 おわりに

今年度、杉田洋先生をお迎えし、多くのご示唆をいただきながら本校の研究を進めることができた。4月17日杉田先生をお迎えした日が、わたしたち教師集団への根本的な意識改革を迫らせた日であった。日々成長していく子ども達にどんな力を育てていきたいのか、話し合うことからスタートし、取り組んできた。教師が変わり児童が変わり、少しずつ学校が変わってきたように感じる。まだまだ研究のスタートについてたところである。今後も研究主題のもと、めざす子ども像に向かいながら、職員一丸となって研究を進めていきたい。